



キザアス



…お兄様のシャツ…お兄様の匂いがする…、んっ…あっ……ク
チュッ!!
あっ!! こんな…匂いを嗅い
だけで、私…こんなに濡れてる、
はあっ! あっ!!
チュクッ!! チュッチュッ…
んっ、あああっ!! ふあっあっ!!
アユアッ、アッ
お兄…様の指、細くて、華奢だ
けれど…私よりもずっと大きくて
…優しい指が、私の…アソコを…、
んんあっ!!
私のヒザを丁寧に撫でてく…往
懐する、何度も…何十回も…んっ
気持ちよくて、気持ち良いのだ
けれど、何か…足りなくて、お兄
様の指が、アソコに…クリ…トリ
…スに当たる様に…少し腰を動か
すのはあっ!! あっあっあっ!!
でもお兄様はその動きに合わせて、
指を引っ込めて「どうしたん
だい? ナナリーお、なんて嬉し
そうに聞いてきて…、相変わらず
ヒザを撫で続ける…んっ…
んうっ!!
時折、指がクリトリスに軽く触
れる、私の体はその度に反応し
てしまって…、でも計算高いお兄
様がミスをするはずはなくて、そ
の動きはわざとで…私は…焦らさ
れている
もっと“気持ちよくして欲しい”
なんて、お兄様に言える訳無い事
をわかっていて…、でも…だんだ
ん…耐えられなくなってくる。誰
にも聞こえないような小さな声
で、私は
「クリト…を、触ってください…さい」
それをお兄様は聞き流さずに、
聞き返す。「聞こえないよ? ナナ
リー」…耳元で囁くように、…吐
息が耳を撫でて、体がビクリと跳
ねてしまう。“お願いします、お
兄様” 心の中で喚ぶだけ、口を開
いても…、うまく言葉が出てきて
くれない



「こんな事をして許されると思っ
ているのですか!？」
「お嬢様は何か勘違いをなされて
いるようですが、鬼作めはお手伝い
したいだけなのです。お嬢様の…登
間の行為の疑きを。」
「鬼作めの肉棒をルルーシュ様のモ
ノだと思ってくれて良いのです
よ?」
「……とにかく…出て行ってくだ
さい」
「主人の望みを言外に察する事も使
用人の務めです。お嬢様に限らず、全
ての肉童は望んでおります。鬼作め
の肉棒を、…小夜子も同じでした」
「っ!まさか、小夜子さんまでっ!、
やっ!何っ!?!」
「これが肉棒というモノです。初めて
お触りになりましたか?」
「いやっ、早く、しまってください」
「そうはまじりません。お嬢様」
ズズズパチパチ!!!!
「痛ッッッ!! いやああああ!!?」
「ふむ、締りはいい、だが、やはりま
だ年齢相応に未発達。肉付きが薄く
柔らかさに掛けますな、だがそれは
それで味があるというモノです。そ
れにこれからの成長を望しめませし
ね。実兄であるルルーシュ様にはで
きないお嬢様の肉童ケアをこの鬼作
めが責任を持って、努めさせていた
できます」
「そんなっ、事は…頼んで、いません」
「痛かったですか?申し訳ありませ
ん。ですが、この行為が終わる頃
にはお嬢様もさっさとご満足されてい
ると思えますよ」
「チュッ! チュパチ!!」 「は
なっ!!」
「やはりお嬢様の年頃ならクリトリ
スが一番感じるのでしょうね。クリ
トリスは男の肉棒と同じと聞しま
す。さっとお嬢様はルルーシュ様の
不在を狙ってはクリトリスを弄り、
小夜子の不在を狙ってはクリトリス
を弄り替えていたのでしょうか」
「そん、な…していません!!」



「いいのです。鬼作めは全て理解しております。鬼作の指がクリトリスを撫でる度に溢れるお嬢様の豊液を鬼作めの肉棒はしっかりと感じております」
「っ!!!」
「この豊液がお嬢様のいやらしさを…、今までに知り返してきた自慰行為の教を鬼作めに伝えてきます…、その証拠にっ!!!」
ズッ、ズニユニユニユニ!!!
「ちゃっ、はちゃっ!!!」
「こうしてクリトリスを弄りながら膈内を擦りあげられるとたまらないでしょう?お嬢様、クリトリスで開発された性器が膈のそれを引き上げているのです。このまま膈内も開発していけば、お嬢様はもっといやらしい淑女になれるのです」
「ちゃっ、からぁ、そんなにこ…
ちゅっ、輪んで、いまっんえっ!!!」
「ふむ、お嬢様の豊液は粘度がとても高いのですね。固い擦触の膈内と肉棒の間でクッションになり、量が増えていくに似ってマイルドな擦触になっていく、二つの全く違った類。しかしそれでいて締りはよく、肉棒をしごき上げる。名器の素質をお持ちですよ」
「そんなにっ!! 変めっ、…られ、てもっ!! んんんっ、にゅあぁあッ!!!」
「お嬢様もそろそろ限界の様ですから、鬼作めもイかせていただきます。お嬢様、膈、失礼します」
「ちゃっ、膈って、イヤッ!!! そんな駄目ッ!!! 赤ちゃんできちゅっうっ!!!」
「精液にまみれる姿は扇情的で鬼作も嫌いではないのですが、膈出しも一度経験される事をお勧めします。鬼作めの射精の契機は子宮を刺激して肉壁を更なる絶頂の高みにいかせると好評なのです。もちろん、射精中にもケアを怠る鬼作ではありません」
「そんなにっ心配はっ、やっ、出てるっ!! イヤッあぁっ!! ああああッ!!!」

「全く、ナナリーの様子が愛だとは思っていたが、貴様の仕事だったのか」
「ナナリー様のボディガード兼、肉童ケアの担当をさせて頂いております、鬼作と申します。CCさんでしたか？よろしければ、あなたの肉童ケアも無料サービスさせて頂いておりますが、どうでしょう？」
「お断りだ。人をいきなり物にする無様な輩に頼む事など…何もっ、こらっ、やめろっ、と、言っ…、ちゅっ!!!」
「こちらの肉童はそうは言っていないようですが…、ちゅぱぱっ、赤む、素晴らしい様子です。それでいて、軽く触れただけで、反応する。いい肉童をお持ちですな」
「ちゅっ、何だ！お前は、そんな顔をして、意外と、上手っ、んんんっ!!!」
「人は見かけで判断できないモノ/ですか？」
「そうだな、んうっ!!!ルレーシュの奴は貴身で、そっちの方には期待できないしなっ…、暇つぶしにはなるかもしれないな」
「お氣に召していただけたようで、何よりです」
「ちゅっあうっ!!!いっ、いいぞっ、もっうっ…ちゅっ、奥の方だ、うん、そこの、そこ、ああっあっ」
「じゅっ、じゅぱぱっ!!!じゅぱぱっ!!!」
「肉童ケア技術的には絶対の自信を持っていますが、それを肉童の管轄に理解していただくには多少の時間が掛かるものです。CCさんの様に直ぐに受け入れていただける方は今まで一人もおりませんでした」
「みふん、淫私だと言いたいのか？これでも随分長く生きているからな、相應に経験を積んでいるだけだよ。それより…もう」
「畏まりました。イかせて差し上げます」
「じゅっ!!!じゅぱぱぱっ」
「うんっ!!!あっあああっ!!!ちゅあああああっ!!!」



ズッズッ!! ズッッ!! ズッ
「んんんっ、あっ、はぁっお全く…ケ
アなどと、んんっ言っていてもさちん
じやる事はやるのだな」
「正しい肉垂ケアは肉棒で行うもので
す」
「ふふん、んっ、まあ、そういう事に、っ
ん、しておくか」
ジュッジュッ!! ジュッジュッ
「それにっ、しても、んんっ!! お前の
チンゴは大きすぎるぞ、大きすぎる、こ
んな…、腹内が全部埋られる…、んん
んうっ、しかもっ一度イッた後だから
…、やっ」
「お褒めに預かり光栄です」
ズンッ、ズッズッ、ズッ!!!
「しかも、牛もチンゴもごついのには的確
に繊細な動きで攻めてくるなんて、ふ
ふふっ、ルルーシュにもこの技術があ
れば、ギアスなどいらなかったのかも
しれないな」
「ギアス?」
「こっちの話だ。けれど、気分がいい
後で害にならない程度に話してやる
よ」
ズッズッ、ズンッズンッズッ!!
「それより、今はイカせてくれ」
「もちろんです。肉垂ケアは恥作めの真
務ですから」
ズッズッ!! ズンッズンッズ
ンッ!!!
「あっすごいっ、んんっ、遠くなったよ
ズンッ、ズンッって、子宮に響くっ、は
なやあぁっ!!!」
ズニユッ、ズキユッズキユッ!!
「あっあっあっ!! うあぁあ!! もっ
と、もっと突いてくれ!! イクッ、イ
クッ!!!」
ドパッドパユルルドパユッ!! ドパッパ
パッ
「なんだ、コレ、イマタのに、やっ熱ッ、
精液がッ!! こんなっ、あぁあぁあ
あぁあぁあううう!!!」
「ふふふ、お気に召されましたか?」
「……、ああ、…本当に凄…い、精液
がお腹の中で、んんん、気持ち、良
かった」





(なにこれ…授乳中のはずなのに、私、胸、はだけて、後ろの男は…誰?)
「全ての人間は私の肉壺ケアの邪魔はできないやアス」理想と言えば理想、しかし嫌がる肉壺を屈服させてこそその鬼畜道。味気なさ過ぎる気も…」
「はっ、やっ、あんた、誰!!?」
「おや、ターゲットを絞る事もできるようです。私は伊藤鬼作と申します。あなたの肉壺ケアに参りました」
「ふざけ…ないでっ!! ちゃあっ、あっ!! こんな状況って、何で皆、普通に授乳を、やっ!! あんたっ、何を」
「超能力…というのが一番近い表現でしょうか、周りの皆様には私達の行為を認識できていないのです」
「認識?」 「まあ、そんな事はよりも一番重要な事はコレでいつでも鬼作めがカレンお嬢様の肉壺ケアをしてさしあげられるという事です」
「だから、ちゃあっ!! やっ!! そんな事頼んでいなっいのっに!!」
「肉壺に肉壺としての悦びを教えて差し上げる。それが鬼作めの使命であります。きっとお喜びいただける事と信じております」
先程、意識混濁時にいろいろと調べさせていただきました。演技のない無意識の反応ですから、私は今、お嬢様以上にお嬢様を理解しております
例えば、カレンお嬢様は上下のピストン運動よりもゆったりとした左右の回転運動の方がお好みようです」
ズニユッ、ズニユニユッウウウ!!!
「ちゃあああ、何!? これえ!!」
「そして、軽く前傾姿勢を取らせ、後部の膈壁を強めに擦るとお嬢様は大変お喜びになります」
「www!!!!!! www!!!!!!!!!!!!!!」



「おや!! 体をそんなに痙攣させて、おイキになられたのですね。ですが肉棒の絶頂前に一人で勝手にイッてしまわれるとは、肉壺としての自覚にかけますね。これはケアに時間がかかりそうだな」
ズッズッ!! ズッズッズッ!!
「はひゃっ、ひゃやっ!! らめっ、いった…んんあああ!! ばっかりだからあ、やうっ!! 何でッ!! こんなうあっあっ、だい…たいっ!! 和、初めてっのっはずなのにっ」
「おや、やはり気付かれていなかったのですね。この一週間、毎日、鬼作めがお嬢様の肉壺ケアをして差し上げていた事に」
「ひえっ、えっ…何…それ」
ズッズッ!! ズンズンズンズン!!
「鬼作めの精子がお嬢様の膈内に無い日はありませんでした。成る程、ギアスの効果時間内に起きた事は時間外にも異常として認識できていないのですね。認識できないまでも、きっと普通にシャワーの時に洗い流していたのですよ」
「やっ、和、こんな男のっ!! 精子を!!?」
「無意識状態でのケアはあまり意味が無かったようですね。ですが、大丈夫です。先週のを取り戻せるように鬼作めも頑張らせてもらいます」
「だからっいらなっいのお!!!」
ズッジュッジュズッジュ
ズウウウッ!!!
「お嬢様、肉壺ケア中のマナーとして肉壺は喘ぎ声を上げるものです。ほら、また鬼作めが膈壁後部契を擦って差し上げます」
「はひゃあああ!! やっあああ!!」
「鬼作めと一緒にイキましょう。肉棒の膨らみがわかりますか? さあ意識を集中して」
「駄目ッ!! 駄目ダメダメダメ
メエエエ!!!」
ドッ!! ドッ!! ドッ!! ドッ!! ドッ!!
ドッ!! ドッ!! ドッ!! ドッ!! ドッ!!



(あれから、休み時間の度にトイレに呼び出されて、犯されて…、肉壺ケアのシャワーを浴びる時間が無いから、鬼作の精子はティッシュで拭ける分しか処理できない。腹にずっと違和感を感じたまま換装を受けて、どうしても奥に精液…残ってしまう。時々どろって出てくる。誰も、何も言わないけれど、…きつと、バレてないって信じたい)

従わなければ、肉壺としての自覚が足りないって言われて、換装中でも換装が終わってもずっと犯され続ける。それで一度、黒の騎士団のミーティングに出れなかった。

サパスを使われると逆らう事ができない。

不意をついて殺してしまえばいいと、…思ったけれど、これは私が我慢すれば済む問題の犠牲になっているのは休み時間のみなのだし、これからの…黒の騎士団としての活動にも、支障を…、いやそんな事は言い訳で、私は、この男の“ケア”がないと、もう。要するに私は

鬼作の肉棒が欲しいのだ。

ジユパッジユパッジユパッ

「はっ、あぁっあっやっやぁぁぁ!! 足、足が、立ってられないっ!! もっやめっ」

「大丈夫です。お嬢様、鬼作様の肉棒でお嬢様の体を支えております」

「そんなッ!! だからっ、その肉棒が原因なのっ!! うぁっあっ!! あぁあぁっうっ」

「やめてと仰られましても鬼作様は肉壺の気持ちを理解しております。お嬢様の肉壺は鬼作様の肉棒をご所望のようですよ？」

「もうっいいからっ、あぁあぁあっ、早く、イッてよ!!」

「その台詞は肉壺として楽められたものではありませんが、まあいいでしょう」

ドビュッ!! ドビュッ!! ドビュッウウッ!!

「うぁっあっあぁあぁぁ」(精液…凄いい、妊娠しちゃうかもしれないのに、私)

「……………気持ち…良い」



「ほ、本当にいいんですか？CCさん、アムタは…、ゼロの」
「おいおい、無粋なことを言うなよ。まあ、やりたくないのなら話は別
だけどな」
「い、いやそんな事は…」
(全く、鬼作の奴め。女の悦びなどとうに忘れていたのに、火をつける
だけつけて、自分は他の女と遊びまわっている。騎士団の連中は体力だ
けはあるんだが…)
「イ、イクゥッ!!!」「おいおい、いきなり醒出しか？まだ私は何もして
いないぞ？」
「す、すまない」「まあいいさ、んんんっ、ほら、どうだ？」「うわっ
うわわっ、醒が、轟いて、すごっ!!」
(硬さも大きさも挿納もまるで足りない、ギアスなどを与えるべきではな
かったか、いやどちらにせよ、あの男は自分のしたいようにしていた
か、あの男に足りない分は人数で補うしかないか)
「ほらお前達も、私に遠慮せずに動け、貧るように腰を動かせ。私は不
死の魔女だからな。普通の女のように壊れたりはしないぞ」
ジュッジュッ、ズジュッジュッ!!
「はむっ、ちゅっちゅっちゅっ!! ぶはっ、うんぬいぞ、やるぢゃない
か、はっ! あんっお下の男も…、今度は長持ちしてっ、んあっ」
「いや、でももうそろそろ」「またイキそうなのか？全く、…まあいい頃
合いか、後ろの奴も…」
「うおっ、急にアナルが絞まって」
「CCさん、俺ももう、イキそうだから、年だけぢゃなくて、口で」「ん
んうっ、ジュッジュッジュッ」
(三人とも…肉棒が…)
ドチャドチャルルルルッ!!!!!!
(精液…熱い)「んっ、んくっんくっ」「CCさんそんな、精液吸い出し
たら…」
「んぬ吸い出したらどうなるんだ？ふふふ、また大きくなった
おおい、後ろと下の奴は交代しろ。心配するなよ。夜はまだ長いんだ」
「いくらでも射精させてやるぞ」



「んっんっ!! あっ、お兄様、起きました? 大丈夫、動かなくていいですよ? お兄様の童身はナナリーがしっかりもらってあげますよ

んうっ! 上半身だけで騎乗位っていうのはちょっと疲れますけど、ある方といっぱい練習させてもらいましたから、きっと満足していただけると思っています

相手の方のお名前ですか? 秘密です。お兄様は怒って何をされるかわかりませんから

お兄様がいけないんですよ? お兄様、なんだか最近忙しそうで、寂しかったんです。そんな時あの方が出てきて、初めは嫌だったんですけどね、楽しくお上手なんです。楽しく、良くて、すっかり疲れます

んっあっ、えっ…あれ? もうイッちゃったんですか? あっ、でもまだ結構硬い。これくらいなら、あっおんっ、硬くなってきた

それでですね、私は世界で一番お兄様の事が好きだから、…ほら好きな相手とこういう事するとしてても気持ち良いっていうじゃないですか。でも、駄目みたいです


お兄様って多分童身ですよ、童身チンポ、駄目チンポ、あんまり気持ち良くないです。でも、これから勉強していけばお兄様ももっと良くなるかもしれない。その方とはほとんど毎日行っていますから、その時された事をお兄様に教えてあげます

えっ? いえ、いくらお兄様の顔みても、その方と行えるのはやめられないです。自力でテクニクを覚えるんですか? うーん、テクニクもそうですけど、あの方のおチンチンはとっても大きいんです。私のちっちゃなおマンコがきゅうきゅうになっちゃうんです。これはもう努力で補えるものではありませんからね。お兄様のものだと、ちょっと…

んっあっおまたイッちゃいましたか? ええ、気持ちよかったですけど、イッ程じゃあなかったです。でも、明日からもよろしくお願ひしますね



「肉童になるって言ったけど…、社通の中でなんて、管だって外にいるのに」
「肉童ケアにはお嬢様の全てを知らなければなりませんから」
「そんな事…どうでもいいけど…」
（社通は相棒でゼロの私への信頼の証、それをこんな形で裏切るなんて）
「お嬢様、今日はお嬢様自ら胸を擦って快感を得る練習をしましょうか」「…はい」
ズッ、ズッ、ズッズッ…
「ゆっくりした動きですね、お嬢様はもっと激しい動きが好みだったと思います
が？」
「はい、…だけど、上手にできなくて」
「お嬢様はこの場所でする事に抵抗を感じていらっしゃるんですね、…ふむ、スピー
カーのボタンはこれですね」
「ちえっ、それ、管に声か!!」「いいのです。羞恥心など忘れて下さい」
ズンッ!!ズンッ!!ズッズッズッ!!
「やっ!!あぁっ、ちうっううっ!!!あっ!!」
「やはり、突き込み始めれば、いつものカレンお嬢様ですね。ほら、はしたない
汁が股間を伝わっていくのを感じてください？」
（管が外でざわついている。学校の時と違う、ギアス…使っていないんだ）
「あーっ!!あっ、うわっ、あっ!!あああ!!」
（声、止められない。日本人の私の居場所はここにしかないのに…、もう）
「うあっ、ああああっ!!やぁっあっ」
（体が鬼作を求めている、騎士団にいる事よりも肉棒に突かれる事を望んでいる）
「お嬢様?もうそろそろイキそうですか?」
「はいっ!!でもっ、鬼作がイクまでは肉童の私は我慢しないと!!」「いい心がけ
です。ご褒美にすでに射精してあげますよ」「はい!ありがとうございます!!」
あっ!!あああっ!!
ドパッドパッ!!ドビュルルルルッ!!!
「うあっ、あっあっ!!ああああっ!!あああ」
（………これで、いいんだ、これで）



CC: ナナリーだけじゃなくて、カレン
にまで手を出していたのか。まあ、予
想していた事だけどな。校内の目ば
しい女は皆、肉童にしたんだろう？

ナナリー: 鬼作さんはお上手でい
らっしゃるから、大勢、肉童さんが
いらっしゃるのも当然の事ですよ
ね。それはそれとして、今日も楽し
ませてくださいね。

カレン: (CCも、鬼作の…
負けないんだから。三こで頑
張って、鬼作の一番の肉童は
私って事を証明しないと)



「半年前はすみませんね、あの時の肉壺ケアのせいで黒の騎士団を退団するハメになってしまった」

「あんっゆいえ、もとから日本独立なんて実現不可能な夢だったんです。ゼロも死んじゃいましたし、ちょうど良かったんです。それよりも、会話に集中して腰の動きがちょっと雑になってませんか？」

「おやおや申し訳ない。それでは…、失礼しますよっ」と

「ふあっ、はっ、うんんゆ それにプリタニア人の私だから、毎日のように鬼作さんと肉壺ケアする事ができるんです。プリタニア人様々です」

「ふふふ」

「？どうしたんですか？」

「いえカレンお嬢様も立派な肉壺になられたものだな、と」

「ふふゆそれもこれもみんな、鬼作さんのおかげです。今日もカレンをいっぱいイかせてくれるんですよゆ」

「もちろんですよ、それっ」

ズッ、ズンッズンッ、ズチュッ!!!

「はひゃんっ、ひゃっ、あっ!!」

あううっ!! すっごい、いきなり、そんなっ!! カレンの弱いところばかりっ!!」

「今日は、お嬢様の足腰が立たなくなるまでお付き合いしましょう」

「あんっ、嬉しいゆ やっあっ、だけど、あっまずいっですっ!! 鬼作さんより先にカレンの肉壺が!!」

「イってしまいそうですか？お嬢様はイキやすすぎる、まあそれもまた個性なのでしょう。いいでしょう。鬼作めも一緒に…」

「ありがとうございます!! ふあっ、あっ、あああ

あああああっっ!!!!!!!」















































































































































































































